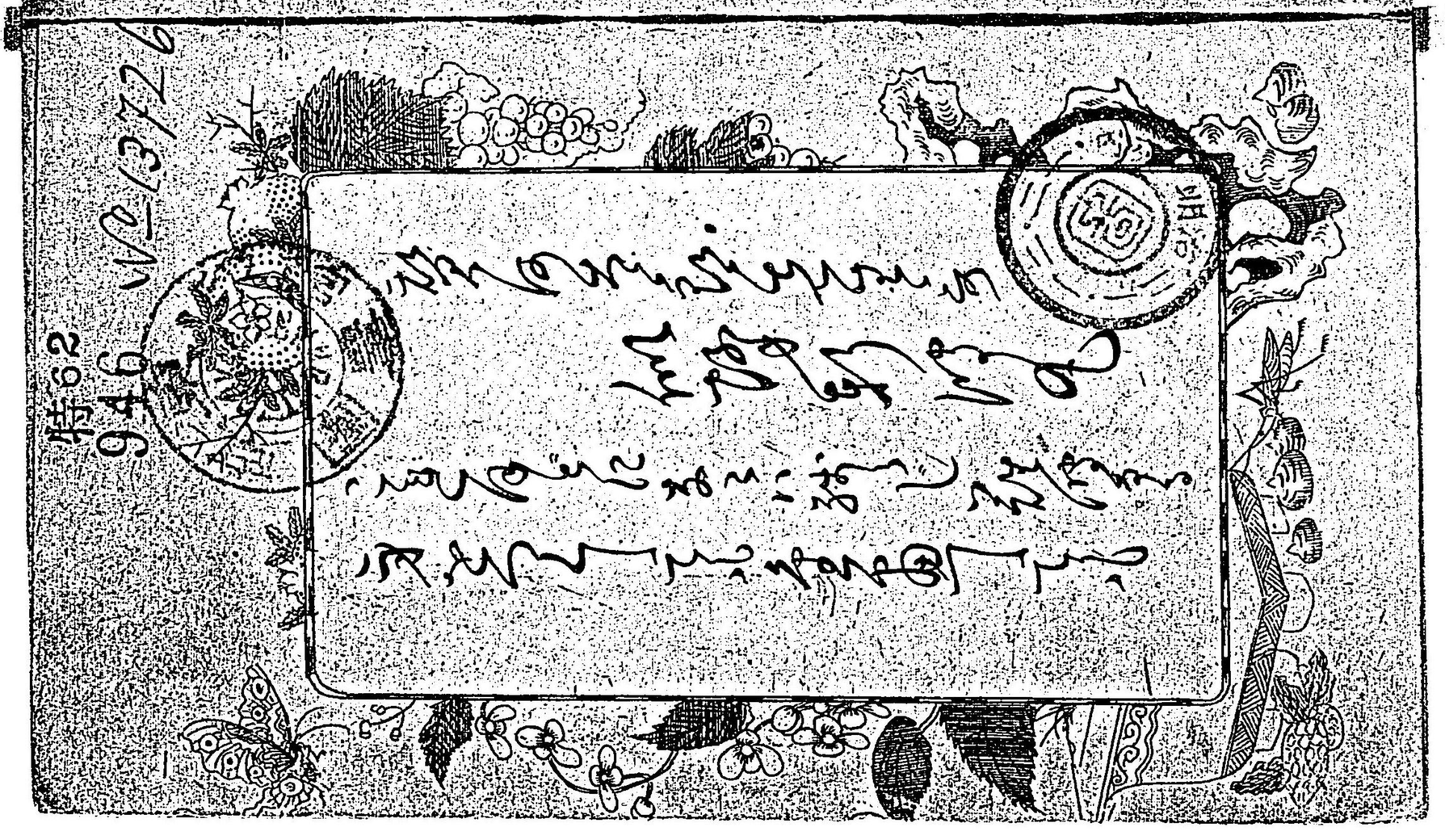
9
2
119



94 62 VD-13772 6

所の名所仏等所
定政の後大坂わたらせ日やたらえん
とゆふ富胆石碩落の棲仙ゆう壺
中にて絶を見めの橋渡て山川を時ふ
御ハたゞまたも排行灯に去義を入
き給わ代ふをへしを忘奥仙
てもましたなの芋侵ねとして
市中にまこ思を反事ハ其心

やたの人をゝ思ハそのの
腹や芋男の誹をうけてゝ屈
ともせぬアハ偉きるる形
此君の男しやは其大略をする
してゆてこ所ゝ代ふ
明治三年の春月
ゝ

目次

三十石の宗論　酒の施行
狐つき　底ぬけろご
馬買　仲人
七草　テンく天満
茶の子　名ごりの酒宴
以上十件

滑稽
隊長　河太郎実記

大館利一編

一名古今無類人の傳

○三十石乗合の宗論

昔しいと竹の舟にのりて詩哥をならうとやさきましき經信君の太平楽もその直打かけきばこそ。ゆうひの貴族ぐるも聞口いきまきましたき。今の世の中のやうに只ことでくき斗にて何こつ知らいでも。いさぎよう馬鹿でもつくせば。蛇もめくらに恐き出る杭もうちてふ〳〵耻をしる〳〵ねば耻〳〵ばと云ふ工合でいはことに困りみて近ごろは汽車汽船などが出来まして京坂の往復もきはめて迅速にて大に便利のそのふかひそうさしさが昔は徒歩のかうめ〳〵ばで三十石にて上下いたしましたさて伏見にて人形をとめうちはを買ひ京橋より畳舟にてびのうましき祇園會もどりの男人数喰ひんうの芋

どらぞも
うゝ山
沒の
とゞ
門や

汁とゝのもちに膳ふ〳〵らし、各〳〵や坂を拝、手島のうしやを悪しやうむおしなるひハ話又浄るう役者のものまゝ礼ら已ゞ
ゐるものを取いだしたらゐしに八釜ましく〳〵やれそのなかに一河のちゞきと
樹のうげこきこゐ他生の縁だとすると黒谷の講中ら念仏と
ふへ作らせゐしいたしれと胴の字の二人づき一人ハ且下一人ハ孤
こ寺の上人とミえて毎慶ゞさきやさいもゞ〳〵ふた猪にくらゝ肥五
人前ゝ〳〵切ゐゞ〳〵ゐうごきもよ〳〵せゞに手に水晶の珠数をつま
ぐり題目をとゐへゐゞ〳〵コレハおゞ〳〵ハ浄土宗とミえるゞ奇特ゝ
ゝ〳〵称名をとゐへさゝ〳〵ゝ念仏ハどこらゞゐうゞいゝとヤシ
れと講中が大にいゝはしてごきハ入らざるゐ字〳〵じゃこちゝゞ
念仏がそきやゞ耳にさハゞれうゐる〳〵ことと矢てどこゞゐゝ〳〵い
といゝゐんやうしゞや何にもし〳〵ぬ愚痴文盲のうきゝ〳〵もゞ六字の
称名をとゐへさいさきハ極楽往生〳〵ゝゐしと元祖さゐが

たしゝゐ証人念仏無間の何のゝのと他宗をそゝるハ何ゞ又ゝ
つとひと真赤にさゝうていきアけハ坊主ハいよ〳〵ふちついてやアそのの
やうに気をもゝきゐ円光どのゞ起証したる親鸞坊ゞむこ入しゝ
弘法どのゞ若衆〳〵ゐもいづきゐる鸞のまハりゞさたゝゐの月をゐゐこや
大ていでゝうゐんぬ花のゐやゝうじゃ大祖日蓮大ゞゝうゐ法花を切
の経王と曰ふも法然ごときゞ手作にゐ〳〵ゝたじけゐ〳〵も三千大千
世界ハもちろん地獄極楽餓鬼畜生有無のゐ〳〵ゝのその中に、総
追捕使の世尊釈迦无尼仏ゐたしゝゐ証拠さとにゝ切諸経ハ法
花経の棟上さでの足代でごゝるさきハ仏一大支の因縁とし〳〵ゐハた
ごこの黄ゐるゝにもの朱ゐる軸八巻たゝうじゃとゝ調ゐえゝゝり上
げゐゐゞ〳〵叩いて説つゝましたら今のゝさゝでゝやゝうゝしゝ〳〵ゝへりた
ていゝゝ〳〵乗合中もゝしゞゝうゝうゝつて居りゝ有十人ゝの黒谷
講ハ泪こゞゝしてゝ〳〵ゝそゝど何でゝも坊主ハ坊主にて説〳〵ゝるさハゝうゝ釈

迦を引祖師とつゝ弁舌富楼那そこのけと法華廣大無辺の功
徳をうぞへ〳〵他宗を誹謗しゝきば八宗九宗の学ゝ合ず歯ぎ
しりをして憎めども妄誕この坊主にハ叶ハじと思へどなほ悔しさ
に一言二言難問しても鯨が鰯のむやうにぞこむきば数多の学ゝ
なれ修羅もやし總ぶいうにしやべりうけても論にたらぬ。たとへを引
ろへつて顛倒の衆生じやと。ゝしりまして法華宗威をまし外道に
ハ若ものが叩き仆せ川へ放りこめと悪口をるゝ坊主ハこきに頭着し
ゝぜ〳〵。たゞ題目を壱たゝゝと唱へつゝ。まもし切つて居りました。
スルとうの強きをくじき弱きをたすくるを以て本色といゝし外。河
内屋太郎兵ヱハまゝこの舟に乗ゝなハせ最前よりの宗論をぶつゝの
賣ま一泡ふゝせてくきんとソツと鄰の人にボチヤ〳〵さゝやけばその人。
につこりとゝゝ。次の人にさゝやきました。そきより次々へとさゝやきれし
各〳〵帯や上じめをときこきをじ珠に代用し百万遍の念仏をし

じめ大音壱にナアマーイダ〳〵と或ハ〳〵こえどもり声うんもなきば乙
もなゝ〳〵ふゝ〳〵ゝも取ずにてとうしい八分の大念仏ときをとゝくき金
念ゝ紀。その壱にたちゝち題目うち消せば坊主ハなせこづるかしこいで
やめていお祖師の名をきと壱たり。こんうきりに唱へ外に軸のるゝゝ
も憎〳〵しこきを全じく帯をじ珠壱はもしろく大念仏弁当
をつゝん叩ぶ。スツパイタンぶつナーマイダと軸とおもてと全音にぶ船
二坐の百万べん船頭も浄土とこえて拍子をとゝて気味よゝ。
たきつる釜のゝゝソレ茶もていさと。もちもこべば〳〵念仏をゝ
ひよく〳〵ときちぶ上りふゝもゝもたもやしてゝるやら。牧方のゝゝい
んうゝ銭ハときどもてうしを合せ魚末ゝゝゝ供養ごと芋汁
たいて出ぶ。この淀川のうゝくずもさそや成仏せう香供養。一
蓮託生のゝゝのにまゝのゝらきゝ法華の僧。念仏にせらゝま
息をきゝしで咽ヒイ〳〵と苦しゝ弁当ど船頭茶ものゝ〳〵恩辱

波羅密破戒の僧坊主なくさものに横着ものと見えにて、うろたへさがして呪術にハ、ヨシ〳〵この百万べんの仕まへしハ明日の晩の上りふでそうが宗門ぞつくりなつて来て妙見講つとめて腹いせをするとなりなひ中で白眼まハせバ船ハおどなく八軒やへつなぎまして後へ〳〵流と人々ハおもひ〳〵家路をさして帰りまし。この僧のことがおるまちがひが可笑でハありません。明日の晩に腹いせんとハ誰を目當にやましたかさてる河太郎ハ計策ます〳〵図にあたりて大勝利を得一人笑して帰りきました

◯神宮の姦詐を看破て

樊噲が牛を屠り百里奚が羊をひさぐハすに及バで犬ひらの流そもなきバ狐をつかふ世もありもなるべし。ここに大坂北在に田島源之丞といふ神ぬしがありました稲荷の社を勧請しまして末社の外こちらを立てまして、そしてその白狐を眷属としてさいはひを除きさいまい

さいの又ハ縁談のよしなし待人の来る来らぬなるひハ失物の有なしなるひハ病気をうかゞひ相場の高下を知りに吉凶を占むるの掌をさしぶのめしやうきバこきがため邵子もいらぬに枕を砕き京房もむなしく擲銭をうしなふと。大虚にほえ万大実をつるふるあつかひで。なりまして近村近里ハもとより大坂にまでなりまして講中ができまして万人渇仰のかうべをこむけます扨田島ハいよ〳〵奇異をならハし愚人をまどハしまして講中ふどが暗夜に帰るときハ多くの提灯をいだし之を送りとゞけその人宅にいたれバ忽ちちやうちん消うせることを狐の尾火といひふらしました。ある日源之丞ハ神代記の講釈をいたしみとて諸方の講中を打よせ高坐にのぼり天の岩戸の件をときかましたがその理ハいはづ〳〵もながらとも日ごろふしぎの狐の力に満坐の聴衆みな〳〵感涙をながしました。講筵

つもんだ
ぬ
きつる
の

ひまをとらし
ちらしふ
ほうをの
どの
川口喜

やいふうばに至り日もはや西にうつむくころ一人の狂子を駕にのせ仁ふつらしき男三人つれそひ来りやうるハ私ども大坂河太郎の手代どもでござり外ゞ四五日以前より主人太郎兵ヱフト乱心いたしてきと口ばしりて稲荷さんのたゝりへとて家内をうけめぐり諸道具を打くだき二便とも坐しにへたれ流しなして見うけ外処ハことく狐の仕ゆゑとそえ外加持祈祷もいたしやしたれど何の効もふくこ家一門大に当惑いたし外何とぞ先生の力にて此の狐をも除わさるやうごきとうを乃願ひ外即ち狐つきも駕にのせて乃玄関さゝに扣へさせやした何卒よろしく乃願ひ外と講中より次にて折ゝきバ源之丞ハ高坐にゐゐ〳〵ゐるふど河太郎とのゐゐ〳〵ぢいふん存じてゐるが平生の気質がよくゐいをゐハち四五日さゝにも本庄の茶ゝせで出ゐゐゐ酒のうへとハ云ふゝ拙者に対して不礼のふるひ余ハ何とも。おもゝゐどそのひすゐをうゐバふて。そゐ番屋ゐ魅入きゐるでゐゐ〳〵ふ遠〳〵ゐゐゐゐ〳〵ふが以来ハ。ちと心を改るやう其許〳〵〳〵〳〵〳〵ゐ見ゆゝきい夫ハ。ともゐゐき先々狂人をつきてござき」と云へバ。手代らハ低頭いたして〳〵乱心とハヤ乍ら狂ゝさり浅ましい主人のをゝ〳〵大勢ごさるその中へつきてゐゐる外聞と存じ外」とヤ外と源之丞ハいや〳〵そきハうさハぬこと。狂人に恥ハゐるさハ。イヤヤ〳〵拙者ゐ狐と自由にいたに。そのふしぎをさいさい群集のこの中にてえゐるゐ講中〳〵ちへのこゐの馳走とすて〳〵ふ講中ども〳〵どうぞ此処で」とえ〳〵ゐるやうにでゐゐ外〳〵手代ら。〳〵ふゝ〳〵ふゝ〳〵満坐の中へ駕を舁こゝ垂きをゐゝきバ帯や紐で委細〳〵さハ〳〵。むちゝ縛り〳〵ゐる〳〵ゐたにゝ〳〵きさした河太郎ハ生〳〵手すりゐるやうにかごの中うゝころび出しさして只目だうをキヨロ〳〵むきさして手拭の猿ぐつハにものご言ごゝ云ハきゐるやうにに人さゝつくゐる源之丞ゐ〳〵ゐに見向もせゞ

その姿ではなけれど知れぬ縛と処は解るがよいとなれと手代らは〜〜
エヨ〜〜こまでさへまだ困り升こまを解ずんと一向乱れて〜〜ハテ夫は
いらぬ気づかひいうなる老狐のしるべでも狐とさへ名がつけばこの源の丞
が見るまへにて障碍をなさば立ろに日本國中に配符をまはしその
狐は扶持でなるまと思るしを変まして手代らうぐる〜巻をとく〜
もやく〜河太郎は満座の中をうけまはりまして件の高坐にとび上り見
臺蹴仆しまして正一位稲荷大明神が河太郎にとりついたと
右團次が忠信したように狐の才ふりしていきなり門へとびいだしま
して十日ごろの夕月夜ひろふて来さい牛の屎をぐふうへりて源之丞
の口へ放り込めばこまいとこ坐の人々がびつくりしまして立さわぐその
ひまに。クワイ〜〜ツクツクワイツクツとつまんでいんだらつまへまましたら
くるひ〜もそが内へ首尾ようかへりましたが河太郎にて途方に暮
ましたい源之丞口へ牛の屎をうみ出しまして〜〜根つる〜一向とけ

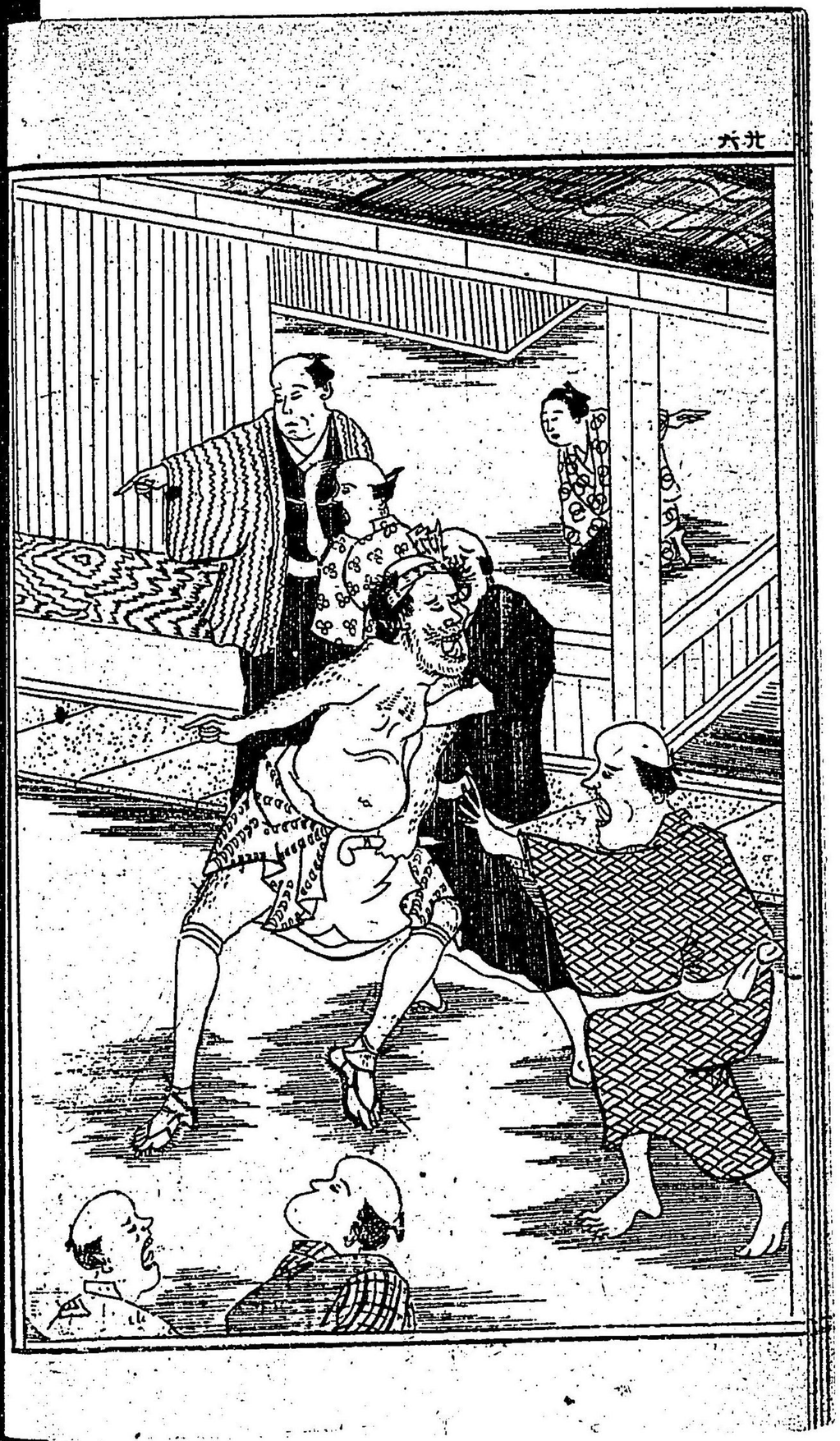
が分らぬ定めて支那の狐でさらふ講のしるを己が小刀は玉蜀黍
てがぶさるうと。眉毛にソロ〜〜津液をあうけまして。さてうの手
代らいいつのるに去にまして消まましたう影をえぐ。こまいと段々
ばるをすが手代に化けましたい北にて人品よれ幇間でなり
まして主人公の河太郎はそが家へ二三日坐敷へこもりまし
て三度の食事のこのみにもたで油なげに小豆飯こまを常〜〜
好物でなりまして

馬をもとめて江戸へ

粟こ石をくひまして駿足もある人なりまして奴隷の手にそつ
うしめらき太津馬のはひぐしとふりまして糠にだも飽くこと
はでなりませぬうの河太郎たまく商用にて江戸表へくりまして。
ばらく滞留しまして用事万端なりひといへへ明日はもや帰坂の出
立いまして知るべのうるへいとまこにまいりまして本丁辺の取引

そこへすめり升と折ふしその店へおびたゞしく代呂物つゝて車カリ
ぐるまが押すめり升まり合に俵物つゝを馬にハタとりなりさし
たゞスルと忽ち鞍をひつくりうへしして馬ハ屏風のごとく仆き升
と夫ようたゞひに口論をもしめましたゞ車カリぐるまハ初ハいき用ひつ
よく全身のいきがくろふぐ〳〵ハしまして悪口いたしましたゞ馬
方ハひとりあがらいたつて悪者理非も道理もすいきすぜんなすつ
さへ馬の丈足折ふりとやしして金銭をむさぼるていですゝ〳〵店の
手代ども〻立いで〻いろ〳〵と挨拶し升きど中々二朱やこ分でハ済
さぬ郎つた馬の價ハ十五両しやうゝその金をゝふゝ又今目のさへ
で馬の丈足ついでくきるゝ左もせあいと荷物も馬もこの店へ引
こんで養生のでゝるまでこゝあ内を厩にして二戈どもに秣焚く
と無法無敵の剛欲もの大ぜいの人もてなましして手代ども
軒カリぎもひいてにるゝすぜ〻ハゾロ〳〵馬を引こむやうにその座ゝ

る合しました河太郎ハ懐中より金子十五両ゝいだしまして
コレ〳〵馬子そのやうに色山なのがにマアぶすき云ふと思ふに
その馬十五両に買てやろと云ひさま金を手に握らせ片うで
をわち上ゞて門口へつき出ゞせば河太郎の勇気にや恐きゝ
ん又十五両の金やほしゝうゝ痛いろひおとくへまゝゝ馬も荷
もつもその侭にしゝうゝづゝして帰りました河太郎がこのふるま
ひにその家の人ハ云ふに及ばゞとおう近所の人たちも何にきま
したとやそでゝさきハ名医ハ、ぶきゝ太鼓の皮もたくハへおいて薬
に用ひすゝとやせど丈足の折きゝこの駄賃馬が何苦の妙薬に
成升とその薬種店の手代ゞやきゝ升と河太郎ハ真顔でやさきゝ升
にハ〳〵管仲ハ老馬を放つて雪中にみちをもとめ伊勢人ハ白馬
にゝさゝつて鞍馬の山に入るとやゝ升丈足の折きたこのやせ馬なと
足につゝて帰りましたゝ定めし芝居ハ無銭でせうとちりすぜ



むしのはなしを
ぶもつて
こちらへ
こんで
大ねの
たべ
ちらす
永人

りに暇乞の挨拶して黒羽二重の羽織に綿入に葛縮緬の羽折きあがりの馬の口とりて別さ〳〵旅宿へ引きましたいろ〳〵繁花なお江戸にでもまひとりとあき変人でにさて外に見こしの馬にや孔子も徳のつくずあ〳〵執鞭士でもいとめとハこんな時のまでなすせう。その後のもなしをすみとこの程のわにハ参勤交代の大名おく。その上街道疫病なり駅々の宿屋場も人馬大にさしつゝへ。ゆゑ外ことのおる宿なさした方帰坂の落ハとし馬にせんと思ふ引ふし馬子がえ〳〵と元より足の引ぐるとえてとうさした河太郎より合よ〳〵買ひましたもそのもぐ白分の荷物をゆ〳〵に員せ。その上に足いるの手代をゆせ〳〵づ〳〵馬の口とりて且那役も馬子や〳〵も宰領役もひんするめ眠子が恋女房しましたやうに何もうも我一人して東海道をぞめ〳〵馬子う〳〵ふて帰らるまましたがこのとゆし馬にゆ

りう来て追分より参宮せ〳〵きましたが伊勢路へ入こゝみとこの馬にいうに鼻息ゆ〳〵くし。ちきりにいゆくき精をもらしみ尤に何したと思ひ外ちゆすつゆぎゆゆ外馬の中へうけ込こ跳まいり狂ひみにハ河太郎も。もてなましましてどう云ふこゝけ〳〵やとよ〳〵見外と牝馬をえうけてたすぬやうにでする成ふどこきいと気がつきまして夫より牝馬をえさせぬやうう手拭で目をふさきさして難ふく阪坂せうきましたきぞいうゆる河太郎もこの馬の色きちがひにハ困り切りましたコンナ迷惑ささとハ腑の切つて〳〵覚えずめと折にもおしやさきゝハ実に尤ふ支でに

若菜貫メして青楼を困らに芹ふづふとびふ。鈴代。ほとけのせ五行とこゝらを七種としみきど昔ハ十二種を用ひみるゆ。その種々ハ公支根源にえそみきど今の世ハ大

る葬とさいふの二種ありてもちひ中にも肝要なる五行あどはその名さへ知らざるものゝ外にこの五行に芹あづまの両種を加へても七種といたし外その比新町の亡八に槌や四郎兵と云ふがありましたるに物いまはしき男にても元旦の雑煮より大三十日の麥飯赤いそしまで一年の行の帳面ひらへ主用の入の小豆餅寒の入の油揚げをべて一寸した式日に何こつそりきてる気にうけて延喜するが性分で外がなる年の正月七日例のめ〳〵早〳〵より起いでいろの七種をまやさんと臺所や庭のをこゝまふ〳〵捜し求め外きどなるように若ふがえすが気にうけるハ常のきしやう大勢の家内をよびよせや金〳〵せんさくし外きど誰ろこ人知るものぶく銭あつたさ一文のをゞゐに家内ハもちろん衆娼下男下女仲居までが蠟燭たきたて上を下へとさがしましたらの青砥左エ門とハ似るやうで大ちがひいよ〳〵主人ハ眉をひそめどうでも内にゐる人がなるふと神棚へ上

げおいた分文の金の千両も失せるやうに五六十人もなる奉公人をそめき立てのヤツサモツサ娼妓ぐるハようたつてそんあそのめるんで何にせう〳〵しい夜のうちるなる八釜しいとつぶやくも耳へをいらぐ佳例を文てハ何まりかまり気にうけ外ハ主の病ひ〳〵どうで今年ハろくでハなるまいと修羅もやし灰吹さいて気をもこ外う〳〵配娼のハ〳〵ブトおもひ出し〳〵もふし旦那さ回いつも五人や十人あ〳〵あづまとつたつけにするう外が今年ハきのふ〳〵とんと来ませあんざと。

ホンにそうでハ葬こうの芭ハきゝませあと外何ど主云へハこあ〳〵ホンにそうでハ葬こうの芭ハきゝませあと外何ど主ハい〳〵気にうけてこの吉兆あ七種を停止にあるこけるなるまい。こち外賣にこぬハ尚以て不吉〳〵や」と向どあうを外に売り外と

いづきもホンにと気ぶついてにいろに買に売るをすまして気のきも主こち外でもふいそうあとそきう〳〵他の家々も近所とまりを外合し外入らぬませに思ひ出しいつきも全じく買ざるやうにこき

たゝかうてゆめのこゝろをたゞすとてひのうやあるゝに
梅村

ハ不しぎと四郎兵王が苍街中を字ねハせバ素屋娼屋のさべつあゝ水戸のうちにそむものハ葬まつ〻者もきゝ〻に〻ハうに青物やど買ものてゝもうやうあるがゆゑとて貯へておく八百やもあゝその年の正月七日に郭のうちにて種のうやいまふた家ハ一軒もあうりしとぞこきをいゝあるとけうと召めるにこの遊女やにそのとき大鳴とていと時めける太夫ゆう強き処へきつゝ當るもちまゝの河太郎うの太夫ゆ無上に自尊かるを憎ミまして。さる揚屋へまゝきゝ〻に太夫をおどり無下にそおとうゝあどい思ふさるゝ打こゝまして四郎兵王大に立腹しまして。この苍街の掟とて茶や揚やへ差紙をまハし河太郎を封じましたきバ若うとも河太郎結句ころでをゝしがうとても封じてくきるあゝ差紙もチト苍やうに摺ものにしてほしい入費ハ己がもる痴漢の引扎のもゝるものもこんあ時にハ吃とまきる夫もでき〻ハ侭よゝハ封じらきゝを新にして面白い返報ゆ

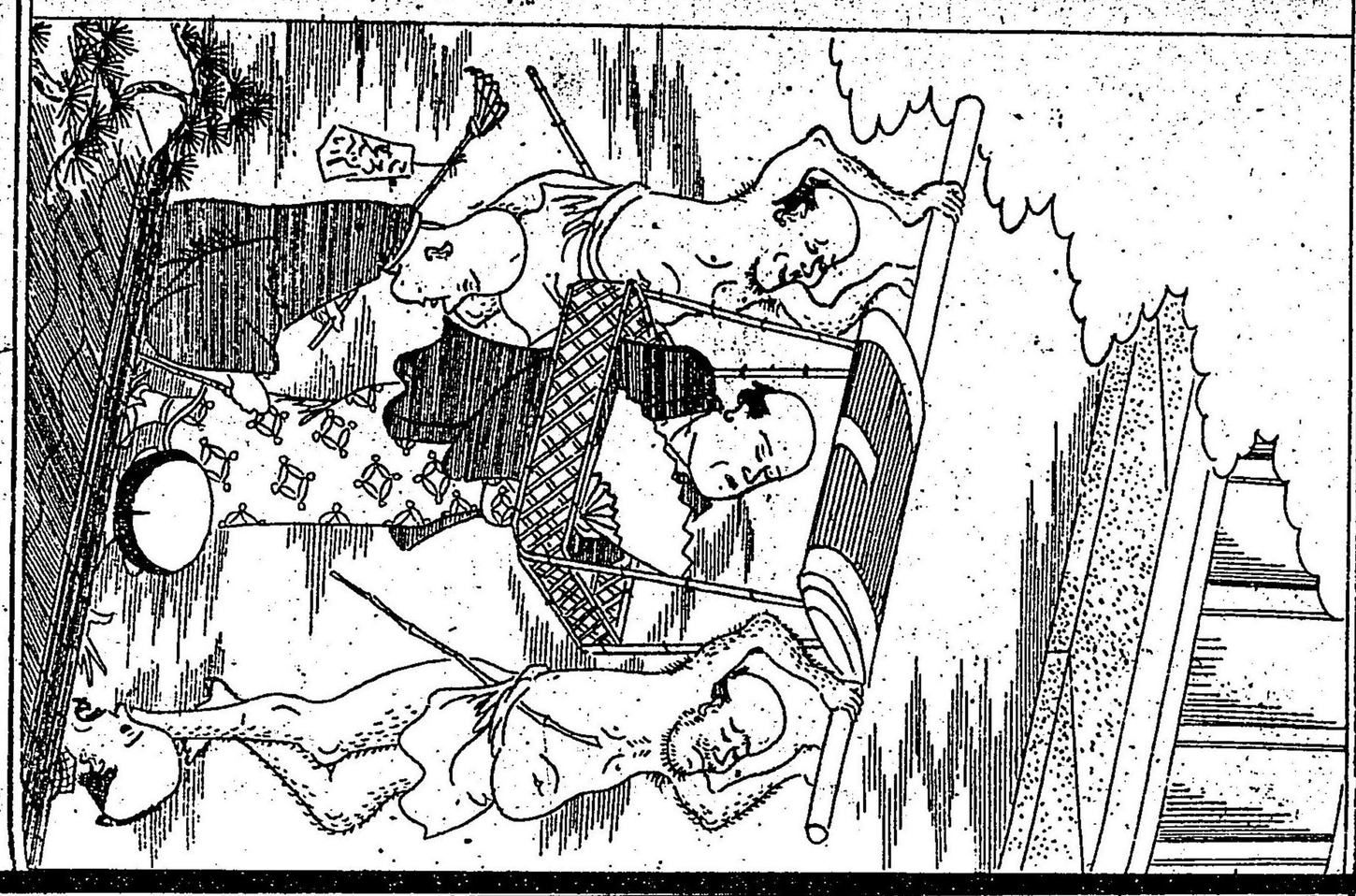
おりもゆろと趣向をゝゝこの正月うゝて四郎兵王の気質を知りて〻ゝ升ゝ四方の木戸に人をつゝまして苍街へハさむ著うゝ残らゝ仕切まして〻ゝを一人封じらきゝその替り苍街中の喉じめしました粥の趣向ハ大奇妙〻〻太平のみ代にいよ〻〻奥ゆる春あるべし

○住吉さうでの底ぬけ駕

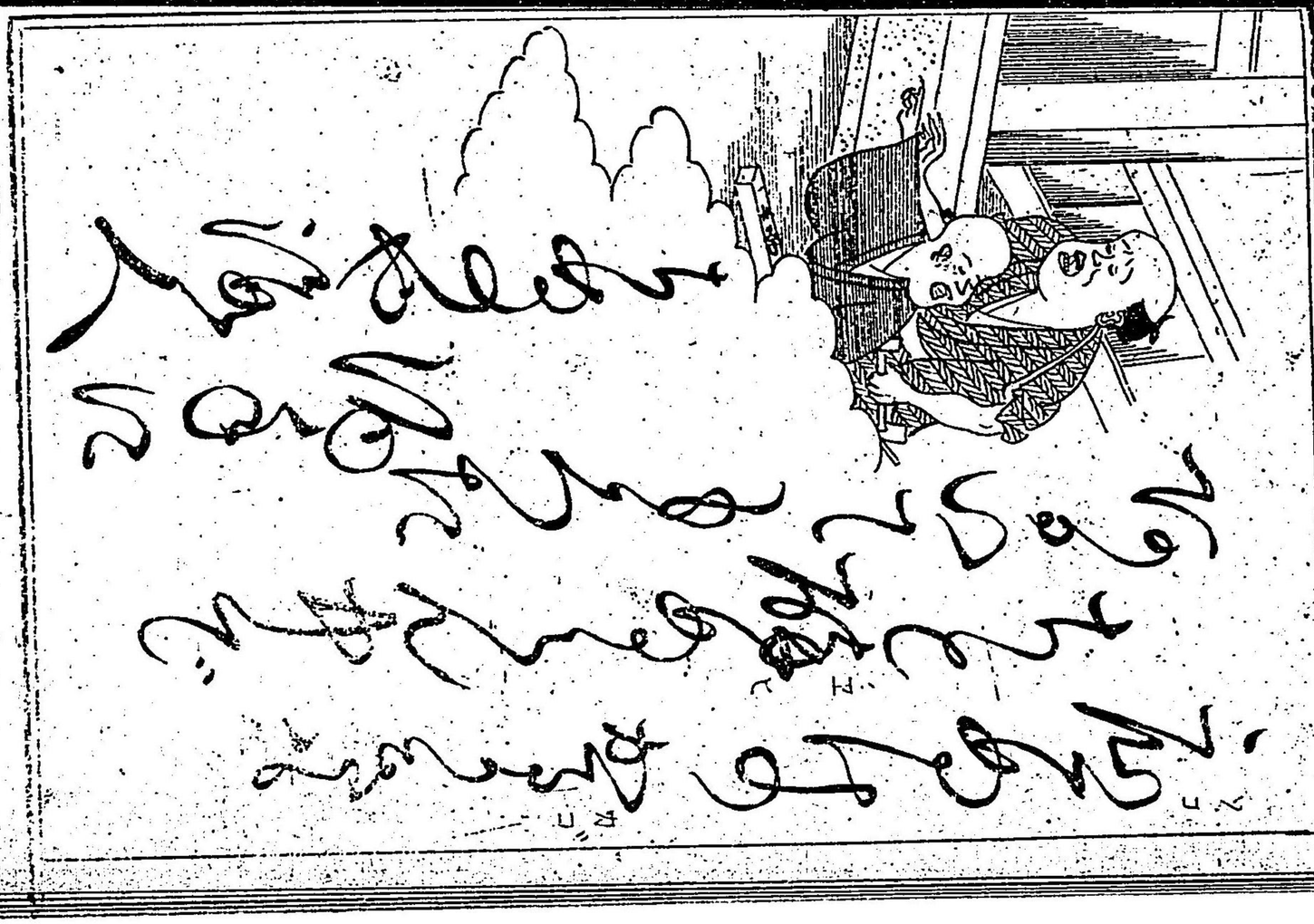
掛まくも畏こき住吉四つのみやしろに鎮ゝまし〻ゝ大御神を。こづゝきの久しきせゝり〻ゝをまして海幸陸さゝを守らそのうへ和哥の祖め神にまし〻せバ遠近の貴賤男女のゆゑとそこぶもの絡繹としてたえるゆゝまん道四法師ハ八旬にゆゝり外てゝ毎月京都ゝりたゝしまゝうとせゝきました哥道に執心ハまして。きむゝしの人ハ信仰ゝまゝ格別でゆゝ外所詮そきゝけとでゆゝくて。ハ名哥ハまゝいと気のつきました狂哥師一騎巻當千ゝゆハ卯

の日とて早朝よりたゞ一人住吉へまうでましたが天下茶屋のも
づきにて不図うしろゝ両の手にて目をおさへてうごかさぬものがあ
るみうゝこきはしゝゝ誰じや〳〵小児めらゝえをするように何をする
みじや放さうしやきと天窓をふりみきゞ一向もおしませぬに壱
いろつくりて〳〵當てゑや〳〵といふその壱ハ〳〵たしゝ中村吉右エ門
と当千ゝ云みと又壱をうへまして〳〵イヤ〳〵そきハ大ちがひと云
のハ〳〵藤川平九郎ゝ〳〵イヤ〳〵こきも又ちがふていると云ふさハ
中山新九郎ゝ〳〵とんと訳がつかぬ役者のあまるハ
和中敬のおやぢでもあるまいし誰にもせよマアさあさうしやきで
きハ術ふい目がいたいと無理やりに手をもゝのけて見物きがそ
の頃大坂にて名うての変人大雅物〳〵こきハ誰ゝと存じさ
ら河太郎先生にまうしまゝしゝさだめて公にもをみましあるゝん
と云みと〳〵まうでざるその元もこ人とゑうるこきハ丁どよいさ

つき」とそきまうこ人全道しまして四社の例を納えにて
ゝぐらを上げ末社の数々順拝し濵辺にうゝき出さしてなにぢ
なゝしの春色をもてなそび取々の鯛のうし肉煮とひらめの
つくりにて酒二三本をなゝ足もとの明いうちにゆゝうゝと三文字
やへも立まうぐいそ〳〵新家の出口まで送りまして近所ハ人力車
或ハ馬車あるひハ流車ゑぐら出来まして至極便利でなり外
がそのころハ今とちがひ徒歩ゝ雲賀にのるまうより仕方がなりませ
んまして河太郎ハ酒手ごゝ三百文にてくもうさに対ゝ當千
ハなるいて今宮まで駕たてがにて駕うたおろし賃銭のこらゞ
もらひまうけ有ぶなりゝ飲つくしまして〳〵めいきさひにもちこめ
と。まろんでなるその柏子なと肩のいき杖をつき駕をおとせが底
めゝて大地へどつと尻もちつきまして河太郎気色をうへて大に
いゝりまして。己きらが底めゝじやん駕まうでそこゝ扶るワイ貴



九十四



九十四

その銭で貴様がのむ。何なと飲でもよいぬが舁入は沈酔
駕は底めけ迷惑あのはおきだろう併おきの内までのきはめ
じやろう底はおうてもはつていめと。そうしさこらへて難題いへば
雲介どもはムツとしましまろ〜〜エハけちあおやりさしや無理いふ
もはつてがはるコンナこのはとこの災難おきらしやとて好デも
せめ怪我のおいのを仕合にコツうちはいて去あしやきとまり
こくはせばいよく面白ろがる河太郎〜〜何はど汝らが力んでも
極めとあり内までのしやかこ仕うてくりやひまが入るその
のおいのも又一奥うこの中ではいて巻るおきが足にはめやれた汝ら
二人はいて來いかしでもはたにまり鼻がつうへるう尻がさはるう髭
がチヨツトつうへても了簡あめとそこおき駕へ足を入き舁と
ろと指は上手もの且那さんはチヨコ〜〜と変るおうこきは又変
つまおこのこはあまもきうくつ私らもまんき賃銭さんども

て持こまはこるうこざう舁ぶ。酒手巻つこと了簡つこと
うぞおいとあ。はこうはは又市中人もこと。ひ
まはと云へば當千は心でうあづきその笑もるはは且那
何はたのしこ何はとはあまアかきはがい云ひさしたまは何
でもはへ引はは。はあまの性分品によまこらうへて汝に徳がつう
ふ俄あうもの見舁堂もつた気でチャリふぶら舁てはことむう
やうにうごうき出させまして。こらぶ狂哥のよみ処まんとぶで
ごさらまう

こきも駕のうちあらばこそはし屋とこ。
底ぶおいとてあにうくふしき。當千
とまはまし河太郎おもしろがり。私も一首巻りまとて取り
はへば
さいまんにはまこもこうしこぶ竹輿の。

おなしい六ときぢ。道ハ一ときぢ

河太郎

〻〻て河太郎がなるく〻につきまして雲介二人ハうごさしながら
して長町よりさいはきぢをやハ〻と本町辺までひるまゝ〻ばば
先棒をしゝうおそく〻ばなと肩をそめる時々ハ杖もさせ遅ろ
ら〻ぐ。早ら〻ぐ足どりそろへてパッシ〻とそこ〻い新こつぜぐ往来
しげき市中をひるまゝにはじめでゐるそのをうしさ。ゆう人とそ
に三さいふし物見だゝい土地ふきバ〻きの人ハやに及ばぐ面ぶハの
家々ようそきも〻とそしういでごきハ何〻るにハうぞと。こふ〻
なにきてたるまにて只ア〻と口ばんごりうごの中にハ河太
郎ひだり扇でこきをるがめなの人々のほんにマア奥がつた
ろ〻つにワイナとなく〻すぐ人を愚弄しておもしろ可笑しく
てが家へ〻らきました。

亡父の年回に配る竿ぐゞ

ふべて世の中ハ人の忌日になるきバ追福のゝめ財米を人々
にほどこしなく〻へ外ハ何国もいにしへよりのゝ〻ハしでなるも
外ろ河太郎なる時おもひ外にハ春秋二度めひがんにハ何
所もゝしこも茶の子とゝふへ餅ぢんぢう干菓子のるを配
りて志とゝこきらハ即坐に茶しゞとゝきバそふハち忌日
のほとけをる思ひいだしなりし世の咄ゝとして供養とも追
善とも云きど又豆腐こんにやく大根にんじん干物るを賜る
ハこき飯の子ゝり茶の子とハ名くるもをうし今こきハ智をふ
るひて賜るものも。ゝに茶の子をくばりゝうもらひてる。ゝに茶の
子ゝやとそろふをえきバ火口ちやそん火吹竹いきるの世帯
乃ゝ〻ゝうゝやうゝものゝ茶ゝるにゝるものゝハ心をもちひるゝてハ
その名すおこりを忘きゝやうにたりゝこと是ゝゝうでハゝいこん
ふる咎めて何の益ゝもたいぬる。世とおしゝうるこそ。ゝンめき

ことしハ丁ど亡父の三十三回忌にあるゝきばいでやてきも可笑し
きゝす茶の子せんとて、なるもの縁者しるべへ竿ぶけにさをなが
をそへて配ぶきました。さをのせんへハ年忌のまつりをたんざくの飾
に、ぶらつゝし大道をもちなるきれと何ごとにやと、そゝあく立どう
そて奥うゝめるものハなりません。豪家ハ小ぜへとちがひ入口にてハ
抱といいだつゝくと中にハまして、うたげてあをバ表にひらへしおを
に手代らハふしぎそうに呼咎めコレ〳〵こゝるハどこの人で
や長さらしいものゝるげおがうゝ案内ゝしにどこへ知らしゝ紙
葛でもとまつるゝおうこちうゝ立つて出るを叱きバ番頭こくび
とゝるむけマチヤレ〳〵餌さしにハ竿がふとい星をうつにハ又
ミじゝしとりもちで番部屋（むゝしハ大金もちの門にき
いづきも番小屋がなりましたナニふぜ軒下をねうりぬと云
ひましたも尤おるでに。ゝきゝさを竹とさをながと茶の子

とハおもひませうぞゝの使ハ玄関〳〵とりつぎの女中〳〵のてゝ
さへ〳〵さを竹をつにいだしまして、河太郎〳〵さんじまし
おちやの子でなりまゝみと云へバ女中ハびつくりし数〳〵
出そうゝ茶の子じやとなにきゝあがらも旦那さまにお
目にゝけると奥のゝへもちハみとふにまや障子につきな
ゝみうゝ坐敷〳〵なりゝ迷ゝこきをそましてコレ〳〵おう
めめつそゝたしゝみやき二布のゝりでもうやゝさうそんゝ
のをさしきへ干してもむものゝと叱りちゝにもむりでハな
うませんなんまりをとゝしい茶の子有主もけらいも何云ふ
ふやらそも〳〵店の番頭ようゝろへの舟そゝういづき
の家へもちまるのうましてゝ礼もエいいまゝそゝの當分ハ
をゝしふるとなにきみゝそがり別してゝうの小いへでい茶
の子ぶうちへもいゝうめとて礼をやさぬのゝまゝゝへつて

なぞをとうさしするう
年の茶の
めいてく
さいて
ちゃを
出てゆく

小言をやましたる家もなりまして。

その比なる人の評に曰く。この竿竹を茶の子とすること謂きなり。按ずるに河太郎が亡父の忌日は四月八日なる歟。この日釈迦の誕生日なり。如来はまたの名天上天下唯我独尊とて三千世界の操師のおや玉なり。自ら天を呼びさしてテンカラ〳〵と曰へばだちまち物利天をブラ下げるの又地をさしてテンカラ〳〵と曰へば金輪際をつ上げるこの時竿竹なる茶大役なり茶は産の役なり。この竹はまたまたち花をさいぐるを役とす。よつて竹に茶を加ふる時は竹茶なり。故にこれを竹茶の大ぶ〳〵り（昔し竹田の大ぶうらくりと云ふて有名なるなり）やつり芝居なり。またまたち今の弁天座その好なりといふ。亦曲縁なる哉

○婚礼のまぶちに喪服を着ず

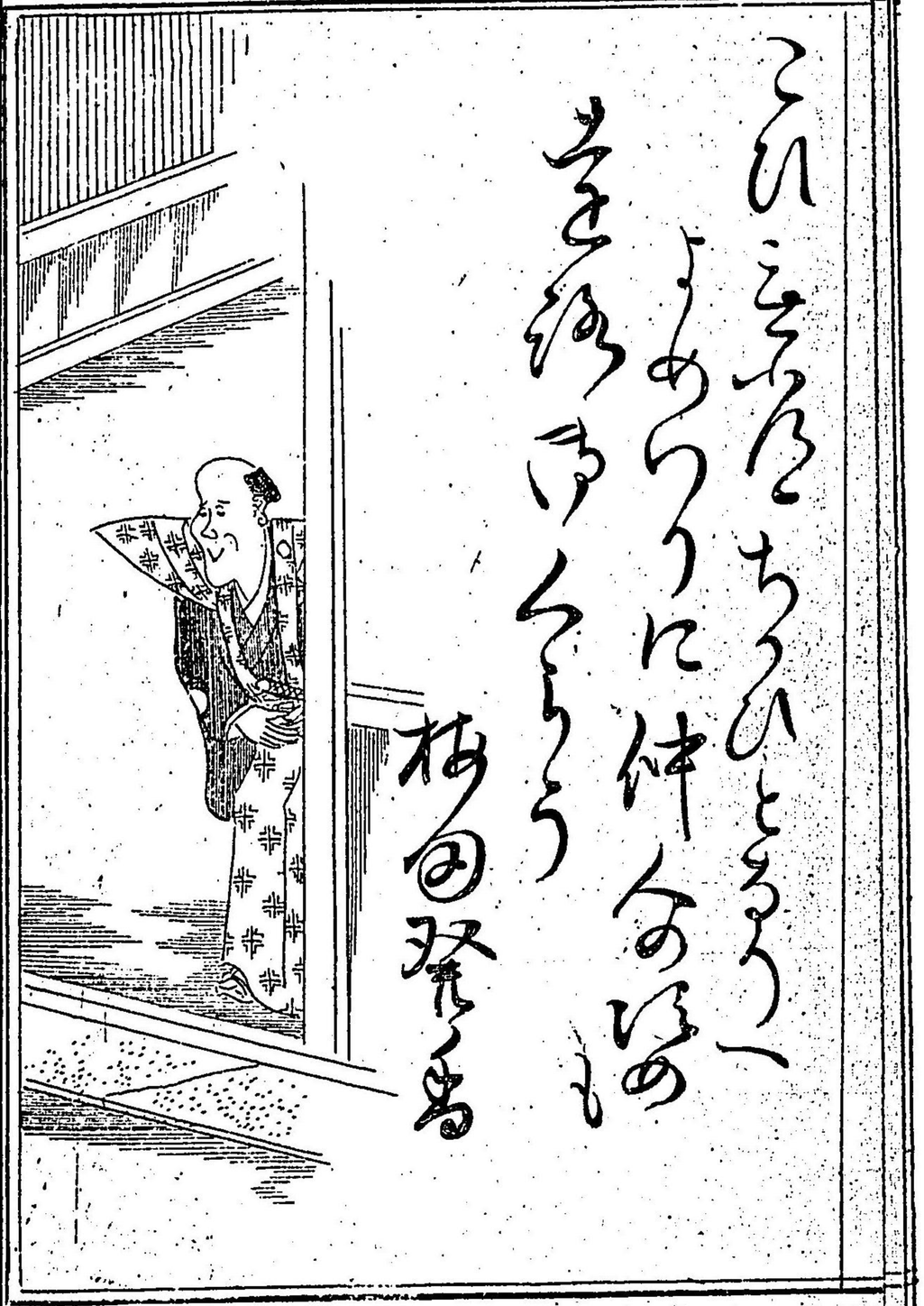
チト六ツしらしをだみが納采。問名。納吉。納徴。請期。親迎の六礼をこんきいの大礼とし。みとうやさいに平野町へんに郡屋永阿とて有福にまるし。みに町人ふざりまし。その外法体しあぶ〳〵うそめにもまる無常を観ぜず仏をき〳〵ひ僧をにく〳〵人がきて死にるをとみに宅中に塩をまいてごきをきまめ。年七十になりみに。まだ息子に家督もゆづりません生をむさぼり死をおもはず欲にふけり利をほしいまゝにいたしみがこきに引へ〳〵子紀二郎が孝をつくして父母につうへ下をなはきんで人とあづけみがもとや年は二十五にまるまでどまだ定りた縁もござりやせん仲人にたのまれて似なはしきなはしき嫁をもとめみまどと成はこのまゝ。まゝにたて。まゝめを思ひみの。の理にていたづらに月日をまくりましたが西どまりに

河内屋次郎兵衛とて近ごろ仕出しました金持ごさるみそこに一人のむすめがありまして。ことし二八にさるみがそのまゝたい小野、小町もまぐるしでにげ。楊貴妃もたゞかて沉じさるし。柳のこゝろにさくらを咲せるやうでなる名をおもるとゝびまして。てのひらの上の珠。そでの中の宝と二親のいつくしゝ浅〻〻いと大切にそだてましたが紀一郎はひそうにうちやの下女をゝらひたがひに人目をまぬぶ山ゝのびてゝふこちもぶふと豆うまおきしうげゝの垣のやぶきをうよひ物としてなるときは香のもの部屋なるとにはは土蔵のひなひ相合傘のらくふにに偕老をゝらひぬゝみそ桶にもたきて全穴をちだう末のすゝ山むゝしゝゝうまぶたつ杣に波こえてもゝきば恋きじ君どゝゝじゃ女ゝこもひ臺箱さげて烏のなゝまに島田をもゝばぬしはゝとゝきはその鐘になゝばゝゝもくゝとふゝうゝちれ

なゝば播木とふゝんと。そのふが中のさゝめごゝもだびゝうきふあきばなゝはるゝ。なこぎがゝゝの垣のやぶきがいぶゝうしゝ娘のそふゝうが合点ひゝゝと子をそる目玉おやにしゝだ河内やのふるおやハきびしゝ女おさるをいはしめ下女もいとさを出さきさしゝゝきがいもせの橋ハ中たえて今ハさがと道雅がふがきもそが必の上とゝちました紀一郎も一日母にむゝひ何とそゝとふゝのおもるとのを書にしてゆハきこの死ひがもし叫ハきばなゝゝ川よしや娘をひつゝげゝの中将のなおふて鬼一口にくゝいるゝとゝつゝとこゝて消えゝんと。おもひ入りてゆみゝ坂おさがまりの母がなんじ清盛入道こみゝゝふ永阿老。義理もへちまもおもひさせゝとこ入むゝこゝ死ぬとゆみにハ大よそゝ嫁にもらひてハ家をちゝ不足ふきこのうへハいたしゝふしと仲入をかつてゆこゝみと次郎兵衛の返答にハふつゝふ女ごゝん

う、下さる段は忝くぞんじ奉り。併し私主人は乃ち拙者の父の
河太郎どの。もふかち貴家とは乃ち一族。そのふかい中をたゞ今
では音信もせずつたなひもあく。然ふつてこさる永阿さま。その
中へ拙者の女をよめ入らしてか主人のおもはくも乃ち奉り
この義はいつくすでも乃ち奉りとめしのさが邪广にあり咄うく
さう奉りと二図あむもそこが無分別気をもて奉はず母おやと一人とうぞ
河太郎どのと和談して。とあるのむをもそめてきうあさき
と鬼の目にもおきあなどこの婆さんがたのそこに永阿老も口
やからきまし。きまば別家手代さくべさる河太郎が宅にいう
ろ〳〵おもはけもじめようちなけて。主人永阿が仕むけをなや
ます入り奉とつゝろてくだる河太郎いろにもこの後は一家中
むつまじく。ぞおぶんへでとあゝ交るべしとさゝ一方は別家で
一方はもんるゐ重縁にもあきば拙者仲人いたにべしとうちや

けてのち挨拶にもたゝかに鰻のやむしくふやうに。あにもかも甘
ひ工合にあうまして。いよ〳〵河太郎の仲人にて万叟の法式
すとゝのひ吉日をえらゝこ婚礼の日をきはめ。もとでにその日にあ
り奉きば仲人の河太郎は次郎兵エの宅へきたり。ふにうやく
の差図そき〳〵にもそ奉きば。いつのるにやう河太郎上に着まし
と黒羽二重るむやくめだもてみと下にはは白無垢なさ上下いづ
きも無紋の死〳〵うぞく。もそふくは判官どのは師直をうしい
あうにいやらしい小刀のつゝを白紙にてつゝみ白いりと全行の
のちやうちんを二張つゝを内ようつきし下男にもたせ己が駕籠
てゝさせて。〳〵手に珠数をつやくゝうあぶら中にはようよめ
輿にひきさゝふて出らきまし。たきが次郎兵エ夫婦ことゞめて
こきいいうある礼式でにとゝ。いい一家やとんるゐぶ家。みひま
もはゝかさて。近いとあうぶ聟の宅こうやの坐敷へとりまして


ひとりゝ
よりに仲今は
まゝらう
梅田琴雄

仲人河太郎せにつれ来と待女郎もいそへもなんすてびつく
うし駄斗もこんぶもうちくりうもさしこに中にとりはとしこふ
くうきひを催しみと巷よめもそろ〳〵涙くゝ客坐のむこも
うろがきて軍のないさつしさうるきば加への女中も本しやく
も泣婆こたやうに女蝶もをてふもくにして目をふけ
が寺僧のふい葬式いだしやうに家内こふ〳〵るに若
しみと死ぬるきゝひの永阿老三々九度ぎすぐ中がにな
りうるて坐しにへ来ましてコレ太郎兵エどのこきいはるんとさつ
しやるぞ祝ふぶうへにもいまふ婚礼めでいるハ云ハ〳〵して
以前のなやすを根にもちてるのすしにを葬礼のけ
いこ嘗にいたさるうと考たいいて気をもこみと河太郎ろ
まちついてコレいしたり永阿老婚礼の大法い葬式をする
ぶとやみすぶこきぶまことでござるすず結納のかそでいる祝

をうへしてつむをきらひ死したるごと〳〵嫁入して。ふ〳〵いびろぬを
よろこびおやざとにい門火をたきこ三々九度の杯も墓所にたとへ
てもざと酒も冷をもちひ嫁ぶしろむ〳〵こきき定法今いんを
おぶこのをぶ〳〵せるるに念入きて心をもちひ拙者が
仲入巷よめもて聟もこる。ふ〳〵いびろぬを夫婦ものに。うと姑
の名をつゝて百とせの後すでもふ〳〵いびろぬこの家でめで
たう往生をつしやるやうに祝しに祝した河太郎粗忽ふす
ハ往らぬと去きゝひるゝ歯にきぬきぬ目をさましして
仲入もまひの口そとおもハきすしたゞこのをきこきにひまどりて
夜もをぶくと明ぬきがをすものとハ気のつきすせぬ斤意地剛
欲すがいきをに死ぬこときゝひのゞ〳〵入道をじめてアいやく
よこ手をうちこのやうつれの明星にさとりひらひてふにもろも
解ゝたこ屋永阿老ゝをあがして三拜し大善知

識の河太郎さんと大に感心せられまして、永阿夫婦ハ隠居しまして金銭うとく掛やしきのうゑに若夫婦にゆづらきました。めでたし〳〵

○寒中酒を乞子に呑ごゝ頭目髄脳身肉手足不惜軀命と仏のとゝ(が)人にものを呑ごとし外をこの上なき功徳とあり米金銀珠宝なるところなく施行しつくし蝦蟇仙人のおひもぎにはなれ拾髪一すぢもなかにつゝぐちのうゑをもゝひきもとるすべ呑ごとし尽しみを仏もよろこびゐたや所詮この世ハうりはひ昔のこそ大福長者のそろ旦那とうやき家督なんなくゆづり受みと又もとゝ分とたるすべ呑ごとしきバ先ぐりそれの世ハ倍さの長者とるやうして五百生とへすゝとゝハそのゝ善行のくとくにより西方極楽浄土の

弥陀のゝ(が)ちりゝ(ざ)なる観音大(が)さろとゝ(ウマ)きゝ(き)ゝ(ゝ)に金色の光をもふち千のゝ(ゝ)ゝ(ゝ)ごとに百味の飲食を五百人まゝ一度ゝとりて食に舌つゝをうちゝ胃患をとゝづゝふをこの上なゝたのしゝとしみさきゝと仏ハ飲酒戒を持して酒のむすをきびしゝいましめゝバ上戸ハこの善行ハ入らぬるものにやゝくゝ酒後のたハむきに河太郎ハやさきましたハいと尤にもとしゝ雪ほう夜をなゝハしみきゝと橋のうゝの非人野外のゝ乞食きついさむさにこらへゝ苦しゝみきゝバ家〳〵ゝ粥やろの施行をふしてゝ寒気をしのぐにハ足りすせん。こめとゝに河太郎のゝもハきみにハ近ごろハ豊年うちつゞきなゝましき乞食でも相應に朝二暮四のたゝハなきゝと今年の寒きびしきさに。

おもきがうへに著もごくつになるさう林火にしるまして、やぶき筵
きて坐をもごく非人の衣ハ大紅蓮の八寒地ごくにも堪るべし
うゝる寒氣の利ゝにハ飯ようゝ四ようゝ古衣の一まいもなどさバ
さぞ善根にするべしと用義おもの仁心むなしに一丁子の
酒をゝむけ利と、ゝや全身になるさいうきをもよ四し忽やち
寒氣をうちゝゝき百藥の長あるゝを利にはおゝえ不計
おもいつれ利にハ酒を施行して坐ゝバ直に寒をゝのゝべし。
古衣やろゝゝ四をろゝゝもの入ハえゝろゝ此さむさに酒をろ
したら功德ハもちろんこきやでにあい施行第一善行第二
たゝしゝゝ歟飲入や変ふ上戸いろゝのものを勧てえゝゝホ
ンにまことによいふぐさゝはもいたつ日ぶこき吉日うゝまいものハ宵
なのすせ善ハいそげじや支度せいと出入のものゝもよびなつ
めにハろにもくろむ酒やろに新酒のましてハ功德ゝうゝい鬼

ころしでハ名がとしい酒もこづゝゝ利いてえましてアイサン(フネナ)
こ艘になゝふ三ぢい四につゝ日本橋のうみ手の川中に舟(フネ)
つふ酒やろゝとよびたて利と。デもめづゝし施行しやとさ(ドウ)
トンだりの酒ろハよう押なひしなひ走りいでえ利と。さふがら
せがにふ銅羅めう鉢ハなゝせんが無縁法界たきうれ
の四べのうまハだのゝしだいと大字に書るし竿のさゝに
くゝう付寒風にうちふびうせ舟にハなやまの四斗樽をつゝうさ
ましてなゝら居風呂にまんゝと酒をたゝへてつかう釜う
炭火をいこらせ酒のにをひをフンゝとさせ利と橋下ものを先
ちんと手ぢうに居なハに非人どもやきようたうゝうる
ゝに呑ぢんバいつう焼石うをさんと、てん手にメンツとりいだ
しまして、こゝへ一ついこちらへもと云ふやんゝ与へ利と。
長町へもやきへまして乞食非人ハ。ふもくだ一夜とまりのへん

サケ
ヨヒ

ろ者その日くらしのものなりしふりそで乞ふる土妓ばかりいかに雲介辻こうしにて酒飲介たん日の神をまつると川中の舟を目がけてにおし寄せてまふ呑たい底いきたいうちひぶくばだい三艘ゝマア七八もいる用意しておきがよいたしやの飲むまいとおもへども焼石ぶつかりちぜぬと咽をあつくしてのびはがり苦るをおそしと待うて寒さもいとい川中へづぶ〳〵とびこみして元舟へとつ〳〵やまびにあるものはたやうるまでとき一にうしまし〳〵ふるをとびゝ外をと手ぶまい〳〵河太郎は大に氣をいつちまして大音上に下知してや外にはい〳〵南北へうせふらとてはこつちの手勢にうろがくるうまいぶるをこと手にたとけ飲ぶるやつらは南へまはし大庄のまはらとうのせい醉〳〵とえ〳〵をとおうば北のぐんぎ上てやき猩々と知つるら柄樽をとゝせ蛇はうまい酒風呂へまそたどたぶと突まとせ切ぶつうへるまぶぬはまゝぬと立うけ〳〵

ろ〳〵べしたゞ一人のうけひきに一人ものきばかりましたはこきや弘誓の如渡得船でもはうるい旦那さんこのうえの善根はなるまいとものうるのゝ介手を合せさんぶ施はうが唐にもはろうどとにいふやらふやらふ弟子あるいはなりの大施行六兵五乞食をそしめとして名うてのしやうばくむきはなつまり飲つゝけそのはかはよそ量まうきどもろうるはまはのども乱に及ばまうせぬはぎやうの功さぶゝ君子の風儀にうふい天を幕とし地をたゝとし寄つはうまいつ飲つゝけ長町どまるのものどるう唐の八仙家の七賢にもおさゝおとりまうせんうち中にも六兵五は李白にもまうゝおよそ二斗に数百ぺん北へはがらき南へまはりのるたびごとの大酒はそあゝこきをおもしろがりまして六ともちつと飲まめうとよゞどもこたへまばづいたこうとたた

飲死しましたが呼のものが。何はきみまして六が四斗樽にのうゝるをゞうを石碑としまして今の千日が墓呼の時分に建てなりました。こきは浪のもあしでなり弁。さてるこの日の施行二時ごがりに伊丹のもろ市北五石岩りつゝしまし たとやだそす

○江南の青楼に俳優を弄び

河太郎がとしがころにまうぜぬものは出ぎたる妻酔ざめのあり野郎づきんと。つゞ。もやぎました内室はさしでもの あうしやそのうはさをゆゞ鰕めたはあをなまゝ飲きました野郎づきん。又いぶうゝいうある情郎まうゝ。まうせざるこそ。をうしゝき。俳優のその徳は古稀の老人八十ぢのおき あ。そがゝろうゝも白川のこついくむまで。と葵ゝ四十や五十は少女やゝうの遍照に極ゝけてる。こきやまことの。ゞゝあめ

しと馬ゝおるは定のこと人にゝるあ。ゝるむらさゝ。ひたへに名しそのの色に朱のころもいうはひつべし。何ゞ坊主がうづゝるゝ祠堂金をつゝうぞねゝ交だして去ぬゝむうはあいうはエテゞしきた甘いもの散らばると鰹鬼こたやうに咽まゝしれでおもはゞチョコゝそこんでやきば屎ゝうき時のさゝめごとに放屁のまるうゝたうりてきぬゝのあきの袖にちゐうてゝるのえゝぬこそ百夜のこひも笑をつと南地のある茶やにて料理場なひるに河太郎ゞを る口まじりに厨下のちゝんのあ酒中戸のしもうじグワラゝゞ。ゝけてをいうさしたは堂じまのある金持のだんあ芝居えさしてこの茶やへ来ましたが行についてすまうゝましたうゝ。

といふ立役者えゝたきましたう河太郎のひざゞをゝいゝう もあゝ低頭もゞゞ件の客のゝ行につゞ。ツカゝとゞしきへゐ ましたきばそきいゝゞ河太郎こゝろゝゝ為のといきどゐ

知らぬの小野郎めそでい鼻ふくぶふ〳〵余の後者といふ〳〵べつにおにもゐる引うけて内証のせそすでして逃つる。その尻のさきめぬにモウそろ〳〵と玉ぐるといふ気にくはぬ己どこそでもう いせしてくきんとびとり思ふてをり升ところへ門に張ふしきい乞食の中でも分掘もの心ろう唐でゝきゝるテン〳〵天満のすだう神るコレハ者ひよい処こいつに。きやつを蹴合していやゐるをそてゐぐさまハちと肝癪も下らゐと河太郎う即妙の思いつた〳〵コリヤ〳〵ゐい汝らを一日揚ゐて酒もめさそゐぜに米も生ゐ客路次ゐ〳〵庭へまハき。コレ〳〵板もと。アノ乞食とえんさんへまハしてゐと云ひ升と家内ゐびつ〳〵うし旦那こきいうるさいよびものゐる暗落ゐ〳〵よしにゐさゐぬうとすみと。河太郎うゐつきまして〳〵イヤ〳〵いゐゐ者ぎしてしやんゐやしきへハ揚ゐぬうゐ予ゐ分ぞゝにさしておきやといやうゐる乞食をむりむりさいこ庭へ

へおひ生〳〵きうきしゐゐ〳〵も底きゝそる〳〵えんさへつくばい升と〳〵さとゐのことでもゐい汝らそのみ振ゐ己やきつい好きゐ。ていつぞハ呼出せうとおもふゐ〳〵者ひおきもひまじや。どうぞ。とつくり番ゐて見せいーすひ番ゐ〳〵。その汐で酒を飲して銭生ゐサヲ〳〵番ゐう立んゐまハくゐさいとゐだてらき。馬鹿らしゐゐ〳〵立ゐゐう。そうゐてう〳〵に破きるゐぬき大鼓たいてむすたて。その汐ぶりをとりをもじゐ升と。一人ようこぶ河太郎よこ手をうつておもしろゐりホンにえゐひもんじや妙々〳〵もちろん古雅でゐゐもいへぬ天の鈿女もおゐまハい〳〵うしこの神るゐが神代にゐ〳〵ハ岩戸の口に番入をおうゐバかるまいとゐめるやゐ。ゐるゐるやゐにぎハしきその芭に。をゐうをしきの哥妓ら も勝手のをとこも炊女もをうしゐゐ〳〵腰をゐうへてころげて。ゐゐためき芭さえ立てゐ真ハじゐりまして。その轉

みてがまるの
といてんくて
かぐら
だふよく
娯用金
笠雨

杯をソトそそま

まいりましてさぶらふ。仲居をまねき酌とりてせめてマアいきつぎしや五六杯もいきいと茶まんにたくむ〜とついでさきばうのさしきまさしのぞく勘十郎〜コレハ藤松めづらしいこすとこへとまきナンと藤松さいぜん〜たやすくでかふ爺も仏ぶるうして。どやらふうろおもしろい褒美にこつのまそふめくきやつたふきまふこの杯その神とのうしてすこつまをけてやりやと寄て藤松新ろ〜めこの河太郎ぶまんだとハおもひよ〜ぬ勘十郎〜且那このぎハぶまうしやと。ままけふそうに云ひみと。河太郎ハおもふつぼとざと柔和にごまとをまつ。まんにもうるやいふのハふいのテン〜もそもまも格べのいた中でるふし金じ川原のふまうち近づきにまつておきやとを食のあまさしまをまく〜もものまねばまふぬ旦那のさしづ。エライふじ松この場のまんだいプセウ〜

にグットのこまましたこ坐の入々大びつくうにて気のとくうり手に汗にぎりましたも尤もだく無礼をしたる返報として食にハ珍味をたべなれ。新ハおいこぐるめの役者の立者と猪鼻禅〜まぐらも新しきものをしまも米ふうタツタ五合そこらで。一日をどりなる〜を食と。スッテ行る〜出なひしやと酒もうさしてそてたのしまました。河太郎ぶ一計ハその膽玉のふときまる三賢を出しまをました漢の姜維も及ぶまじとその場人々云いもやしました

○交を謝せんとして小舟に友を請ひ

小隠ハ山にとる大隠ハ市に居たまる河太郎ハとし耳順をこえ千遊万楽しつくしまして。まをもまるもふき。たいのおや父とえこえみまきど切まバいよ〜ぶ仰がバ

すこぶる高ぶらで赤えりが好かとおもはれ升と忽然とし
てカゲマも召さるゝ何処風がふいてか茶挽にお成り。
御輿にまたがりては住よしへまゐりましたなれども狸と
ありある時は狐となりきました。その仙奇あり。その変妙之
きゝばこの世の通仙もこの老人に手をおいて口なくもの
一人もなうござりませねばその旅まづいたこまるものをこしらへさる
などはこの先生を称しまして太上老君河伯大人と
申ましたもいとをろし。そのころの池仙右エ門但馬や作
平木草や宗十郎大幸里仙住屋宅兵エ米や仁平な
どとてひろは大坂の町中にもなけて名だゝき豪家が
ありました酒茶連俳に一坐しまして河太郎とはこゝに
出あひましたが一日河太郎ときよ四状がきました

こゝろふくなにごとにやとひらいてみますれば。その文言に
曰く

大暑難凌候処各々様弥御清安奉
珍賀候。陳ば拙老義永々雅筵に列り
候春顔を忝ふ候処漸く以て老衰に及び
随而嚢中不自由に罷成難打続御高席
へ出遊致候事も無覚束候に付依之一世一代
之粗酒を差上度明廿四日一葉の小舟を
淀屋橋の濱辺に浮べ申候間御出會被下
度尚其節者又々今一応ご案内可申上候
まづは上

林鐘二十三日　河内屋太郎兵衛

諸輩不同

丁、池仙右ヱ門様
但馬屋作平様
木草屋宗十郎様
大幸　里仙様
住屋宅兵衛様
米屋　仁平様

〻〻て家々へ回りましたきばいづきも赤きよし使にゆい
さつし狀とぞの使ゆ口上にて。とゝすさまにも明朝四つどき
に大幸さまへ出ゆひ給ひ一所に財布ゆ持ちはがゝ〻
その節こゆんゆいやゆげ外とて伺へりましたゆくきば六月二
十四日こゆ〻心にはもひ外にハ河太郎ぬしゆ例の気し
つ一世一代とゆるゝハさだめて結構手をつくしてさぞ

めづらしゆ馳走もゆゝんとはの〻〻衣服に善美をつくし
大幸の家にうちそろひ案内はそしと待をり外うち。
使のをとこきたりゝきばゆみゆ〻一僕めしつきさして。そ
の男にいやゆばき川辺に出外と淀やゞしの上の岸にさ
もえぐるしゆ茶ゆにゆぶ紙の化ものゆる。ゆゆ舟
入ひとりスッパゆらで。ゆんどしゆゝ〻ゆてゆ外天神のよ
ひゆつりでもすゞゆ彩でゆゝ外ゝゝゆにきぞとはもゆ舟も
ゆ〻何さまきハ供のをとこのゆるゆゆ。すゆひゝゝの舟
ゆるゝゆにもせち。ききでハゆるさいとゆゆ。ゆゝして
をり外と表のゆゝり河太郎もゆゝまつけて。ゆひ上りサア〻
きゝへと請じゝきばハ六人の客ハゆびつくりし。ききハ名にきく
トギやゝ松ゝたばしハ茶ゆのウロ〻（トギヤロ　サロ〻ハきた　ふき舟の方言なり）
ゝゝゝゝもゆゝいゝるさい舟と。ゆゆたきゆから乗ゝつり外と

金ちゃんに
きらくらふる目を
さけあへーもいい
のうきうの拵ふ
稲ふみ丸

亭主といふも七人づめ三十石ののりなれにつめ〳〵るいとまもなく
こゝろ〳〵も窮屈さう舳の狐〳〵ふるゝ家来しもと亭主の
さしづにつれ六人の下男をとりこめば膝の上に尻をおきま
して舟人はいらきません。杯こつおく呼もなりませんにコテ
くさげ重とりだしまして〳〵さて今日はいづれも和参ふく
ゝ光来。下てゞ考へこゝ舟拙老もおひ〳〵年ゝむき内証もさ
いしくゝ我をもつて出なひいやもいろいとなじ雅楚を汚
しみもふうだり。ゝよく〳〵献くこゝと我のこゝとしめて有
の手提ひらけば冬瓜とやきどうふに白板すぢたこ三種の
にしめ今二色はなぶりえそと。鱠のさしみ主も僕も和えて
なハせ。こゝはは大に駝走と口にはいへどこゝは和奥吸もものこつ
出さばこそ今さゝろといそきもぜ〳〵汗のこゝふいて有りみと
河太郎一人奥じぶりをり外うちにはひ〳〵遊泰の花やうぶ

川おもせましと満外きど河太郎うふきすんぶ。さの上も
ふき古茶ふ。大坂名うての金持〳〵。さて〳〵〳〵ふ
へしなふて酒は裏に入り〳〵〳〵つしふ〳〵て晩すでゐる
ふら何人とまるものろこゝる前世のいんぐさでなろと六人の
こゝろ入り外そのうちに舟はチク〳〵のがりましさが山奇のも
ふ〳〵今の中のゝ公園地のとこゝろ。なこゝふ。一艘こゝつけま
したゝたきゝとよく〳〵こゝきば南北中のたいこもちども。善六。星
平与三八に今一人はその名うての千り画うきの二挺斎
ふふ〳〵にはこゝまつにだ旦那ゝ今日はゝ愉快ろうしこゝちで
飲んでゐるましてはゝ〳〵〳〵舟ゝ邪ゝいさしゝドンチャンでもて
すぢゝさくらの宮へふ。つふき。ワッサリといたゝきすぢうヤ外と六
人は何を云ふやらこの川中にこゝまゝうゝ〳〵た舟がなゝふうと思り
外ゝまゝとサウはいたきゝ。サア〳〵京へふうとつきて上りやゝびりゝがきて

どふもすゝめとぶさげつゝ川嵜やで上りみと大樓松三艘中流
によこたわり美女數十巷のごとく奉鼓糸竹にぎひうたふをそへてコチ
らの連中ハうゝ山しさうに現ぬらしるがめうち近づらぶとや射間と
もハ乘うつゝ旦那コチラへ〳〵どと各六人の手をとりました揚やの
むすめ茶やの娘仲居哥妓もそゑ気にいりの諸巷街〳〵ひの玉そろ
へ大夫も六人ひふちハ子の池さゐ千町ハたじやを千代づるハ住や
さゐ芳野ハ木くさやを巷扇ハ大業を染野ハ米やさゐとおの
〳〵ふじをゝうこめバ人々ときハとこどひつくり。さて主人公ハ
粋中の孔明うゑ公の二世二代奇にして妙之といつきも大にう
ろきいたせバ數十の三絃雷のごとく。杯盤狼藉酒ハいつゝの好
をゆバきこ向や〳〵たい大酩酊百種八珍もちハこび〳〵鮮一菜さ
ものハ〳〵ゝまもなく大いゝふ六人も見ふどの殿高とハ思ひのふの大
振舞。とふでも通しやおや玉しやと大うゝき巷火ハのろしゑ

つゝゝだきゝ〳〵て夜もいさ〳〵文みきバソロ〳〵舟を下しまして。
涙巷橋の岸へつゝ外きどゝふ〳〵足もとよろ〳〵ふ破ふてハゐるう
きゐとヤ外とこ挺斎どつこいとこにめろうハふいとそバゐる大鼓ドン
〳〵ゆひづに遊所駕バラ〳〵と卅挺ときハいゝふるゆ嬉向そゆ
〳〵さで心をつゝゝきゝるに乘らゐバふるゆいと六人ゐゐきバ女と
もゝふこ全にのるや否や射間どもゝいつそふて各〳〵巷足清
の郷へと入きゝ。河太郎一人ふうのこゝきたゐその日の趣
向もとのやゝゝに乘うつりさびしく私宅へゝへらきゝるゐく
て七月の部季すゝに。ゝきハ新町より六人の筆頭子の池
へその日のゆげ代むゝひ駕門出の祝儀諸入費〆ゝ所
ゐ八十五両又南地ゝう五十五両北の入用ハ巷火代とゝに
て共十五両丁と合せて二百十両めい〳〵卅五両づゝの大散財
こきハ何ゝるゐちゐひそと根とゝりて探索にきバ大神のよい祭

は且那をゝの原参會有カこゝいはやうにして馳走しやとゝのふ
ゝの原差図を河太郎の原傳言とすてゝおの〳〵又びつくりゝ
めい〳〵合方の餌にくらひつき我をゝきらゝが不調法原つぱり
きやつがふるやしい褌
ほした樓船ノ提
重のゝめりそそと
ふゝのさし弟ゝ
ふゝと思へどそき
はよつぽとゝのとの
祭りでしゝ

河太郎実記終

明治二十一年十一月二十日印刷成功
全　年十二月七日出版御届
定價　十錢
編著印刷兼発行人　大阪東区上本町二丁目十二番地　大館利一
発賣所　全　大阪南久太郎町四丁目　安井文欽堂
北久太郎町四丁目　林竹次郎

091621-000-8

特62-946

河太郎実記

大館　利一／編

M21

DBO-0067